

I 多様な世代でともに進める ジェンダー平等

第1章

「今よりましな社会」を次の世代に手渡すために 多様な世代がともに進めるジェンダー平等

上野千鶴子

1 フェミニズムの風向きが変わった？

ここ数年、フェミニズムに追い風が吹いてきた。それまでは逆風だったのに、風向きが変わったとを感じる。変えたのは若い女性たちだ。

第二波フェミニズムから半世紀。フェミニズムはずっと叩かれ、嫌われてきたのに、フェミニストと名のることをためらわない若い女性が増えてきた。上の世代の女たちは、フェミニズムの主張に同調していても、「フェミニストではありませんがI'm not feminist, but…」と露払いをしなければ正論を口にすることすらできなかったのに、若い女性たちは、こんな不条理な差別をわたしがガマンする理由はない、と正当な怒りを覚えるようになった。

MeToo運動の肩を压したのは、性暴力被害者として顔と名前をさらした伊藤詩織さん¹⁾だった。そこに# KuTooの声をあげて、石川優美さんが登場した。一部の企業はこれに応じて、女性にパンプスを履くことを強制しないと約束した。あげた声は届いたのだ。実父による娘の性虐待裁判で被告が無罪になったことに怒りを覚えた女性たちが、全国でフラワーデモを実施した。運動の裾野が次々に広がっていくのを目の当たりにした。

わたしがはっきり変化を感じたのは、若い世代だけでなく、年長の世代の態度に変化が生じたことである。伊藤詩織さんは、聞くに堪えないような誹

謗や中傷を浴びたけれども、その一方で年長の世代の女からこんな発言を引き出した。50代の作家・中島京子さんは、伊藤さんとの対談でこう発言している。

「もし私たちの世代がちゃんと声をあげていれば、社会も少しは変わっていたかもしれない。詩織さんがひとりで頑張らなければならない状況にしまい、本当に申し訳ない」²⁾。

こういう声が公共のメディアに登場したとき、空気が変わった、と実感した。

それまで年長の女の役割は、セクハラを告発した若い女性に対して「そんなことを言い立てるとあなたのためにならないわよ」とか「うまくいなすのがオトナの女というものよ」と、抑える側に立ってきたものだ。事実、TV朝日の女性報道記者が福田財務次官（当時）から受けたセクハラを上司に訴えたとき、その上司（女性だった）は「あなたのためにならない」と言って握りつぶす側にまわった。この女性記者が週刊誌にリークせざるを得なかったのは、社内で口を封じられたからだ。その直後に開催された新聞労連全国女性集会³⁾の場では、「セクハラは業務の一環だと思っていた」というショッキングな発言と共に、「我慢し黙認してきたことが最悪の結果を生んだ」という反省の声が聞かれた。その後、民放労連が、調査にもとづいて女性管理職割合などの初のジェンダー統計を発表した⁴⁾。

#MeToo運動が起きたとき、内外のジャーナリストから取材を受けたが、判で捺したような質問にがっかりした。彼らは「#MeToo運動は海外では拡がりましたが、日本では拡がらなかったのはなぜですか？」と訊いてきたのだ。わたしの知る限り、熱気にあふれる院内集会も開かれたし、新宿アルタ前では若者たちが「#私は黙らない」とマイクを握った⁵⁾。それを取材に来なかったのは誰？ 報道しなかったのは誰？ と問いつめたい気分だった。あとである大手メディアの女性記者から、取材企画書を出したら、デスクから「報道価値がない」と握りつぶされたと聞いた。超党派の女性議員たちも、当時の財務大臣・麻生太郎氏のもとへ抗議を届けた。彼女たちの姿を

見て、自民党の男性議員（当時）長尾敬氏が「この人たちはセクハラに遭わない方々です」と言ったのは有名だ。女の価値は男をムラムラさせることにしかない、と思ひこむこの長尾発言こそ、セクハラ発言というべきだろう。

アメリカでの#MeTooは、芸能界のセレブの性暴力被害の告発だったからメディアイベントとして大きく取り上げられたが、日本でもアート界のセクハラを告発する女性が登場した。#NotSurprised（私たちは驚かない）というハッシュタグは、そんなことがあるってみんな知ってた、でも表に出なかっただけ、という気分を伝えている。数年遅れたが、今年になって映画界のセクハラ疑惑に是枝裕和監督らが抗議声明を発表し⁶⁾、ようやく実態調査のためのJFP（ジャパン・フィルム・プロジェクト）という一般社団法人が立ち上がった。#MeTooの波及効果は、深く広く浸透している。#MeTooだけでなく、被害者のあなたを孤立させないという#WithYouの運動も起き、「#もう終わりにしよう」という声もあがった。

男性週刊誌SPA!が「ヤレる女子大生ランキング」を特集すると、それに対してただちに女子学生から抗議の声があがった。彼女たちは編集部と対話して、謝罪を引き出した。主導したのはVoiceUpJapanという学生団体を率いる山本和奈さんだった。

コロナ禍が始まってからも、SNS上で若い女性のオンライン・アクティビズムが活発になった。民放の深夜ラジオ番組でお笑い芸人・岡村隆史氏の風俗蔑視発言が報道されると、ただちに抗議署名の運動が起きた。ネットリンチだ、という批判も聞かれたが、この運動は本人の謝罪と反省を引き出した⁷⁾。

記憶に新しいのは、五輪組織委員会会長（当時）・森喜朗氏の女性差別発言による辞任だろう。オンライン上でただちに抗議署名が呼びかけられ、10万筆を超えた。当初は「またか」「やれやれ」と諦めの声が聞かれ、謝罪で幕引きを図ろうとしたが、怒りの声の高まりに辞任に追いつめられた。「うちの（女性）理事さんはわきまえておられる」という森氏の発言を逆手にとって、「#わきまえない女」のハッシュタグ・アクティビズムがネット上で拡

がった。その中に、「自分にもわきまえ癖がついていた、反省した」という発言があった。こんな発言を女性は痛みを伴わずには口にすることができない。森氏の発言のような場所に居合わせたときに、反論できなかつたり、呑みこんだり、つられて笑いに同調したりした無念さ、悔しさ、怒りを、多くの女性が「あるある」感を伴って経験しているからだ。

2 フェミニズムの第四の波

2010年代に入ってからこのフェミニズムへの追い風を、第四波フェミニズムと呼んでよいだろうか？ 歴史はレイトカマーによって判定されるから、後になってそう定義されることもあるだろう。20世紀初頭の第一波フェミニズムは、1960年代の第二波フェミニズムが登場してから事後的に名づけられた。同じように、90年代のポップカルチャーやサブカルのなかで花開いた女性の表現活動を第三波フェミニズムと呼ぶ場合もあるし、それに習って、今日のフェミニズムの盛り上がりをも第四波フェミニズムと名づけることもできる。

このフェミニズムの第四の波にはいくつかの特徴がある。

第1は担い手の世代交替である。ウーマン・リブに直接影響を受けた第二波フェミニズムのパイオニアたちは、軒並み高齢化した。大学で教えていた女性学・ジェンダー研究の第一世代も、あいついで定年で退職した。その後続の世代は、リブやその後に続いた活動家たちが、男メディアから揶揄され、叩かれ、誹謗されてきたことを目の当たりにしたから、男を敵にまわすようなことはしないとパイオニア世代の背を見て学んだのかもしれない。事実フェミニズム後続世代には、フェミニズムから距離を置いてきた、と語る女性が多い。

現在の第四波フェミニズムの担い手はリブ以後いわば第三世代、パイオニア世代からみれば娘というより孫世代に当たる。彼女たちはフェミニストをためらわずに名のるが、どこでフェミニズムを知ったのという問いに対して、

びっくりするような答えが返ってくることがある。国連スピーチで有名なエマ・ワトソンとか、韓国フェミニズムからの影響というのだ。フェミニズムの情報は外から入ってきて、かっこいいものと受け止められているふしがある。セレブのブランド、ディオールやグッチがフェミニズムに参入し、「We should all be feminist」というロゴをつけたTシャツを高額で売り出すような時代だ。国境のハードルが低くなり、海外の情報が入るのはうれしいことだけれど、そんな答えを聞くと、「日本にもフェミニズムはあったんだけど……」とつぶやいて、情報が伝わっていないことに愕然とする。世代交替の過程で、フェミニズムに対するネガティブなイメージもポジティブなイメージもどちらも持たない、いわば先入見のない世代が登場したのだろう。

外国のフェミニスト、チママンダ・ンゴディ・アディーチェの『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』⁸⁾や、ロクサーヌ・ゲイの『バッド・フェミニスト』⁹⁾が翻訳され、よく読まれたが、なあんだ、わたしたちが言ってきたことと同じじゃない、今さら翻訳でこういうメッセージを読まなければならぬなんて、と鼻白んだ。だが、同じメッセージは何度でもくりかえし、違う声や違う言語で発信されなければならないのだろう。そういう若い世代がフェミニズムの情報に接したとき、これは自分の経験を説明してくれる、と新たにフェミニズムを再発見したのかもしれない。わたしが『女ざらい ニッポンのミソジニー』¹⁰⁾を刊行したとき、タイトルに「フェミニズム」や「ジェンダー」をつけるのを避けた。「フェミニズム」をタイトルに入れると、読者の腰が退けて本が売れない、と言われた時代だった。『女ざらい』は若い読者によく読まれたが、読者から「こんな考えがあるなんて、新鮮」と言われて驚いたことを覚えている。今では「フェミニズム」も「ジェンダー」も本のタイトルに次々に登場している¹¹⁾。

第2に、この新しい担い手たちは少子化世代の子どもたちだった。ひとりっ子かせいぜいきょうだいはふたりまで。娘ばかりの家庭も多い。彼女たちが育った時代に女子は急速に高学歴化し、4年制大学進学率が同年齢人口の5割近くに達した。親にとっては娘も教育投資の対象になり、息子並みに将来

に期待をかけるようになったのだ。わたしは彼女たちを「女の顔をした息子」と呼んだ。それだけでなく、高齢化に伴って、老親の娘に対する期待は息子に対する期待以上に高まっていた。親から注目され、期待され、大切に育てられた娘たちが、学校というタテマエ平等の社会から一歩外に出たとたん、理不尽な差別に直面する。長い間ガマンと控えめは女の美德だったが、ガマンしない娘たちは、こんなばかげた差別に自分がガマンする理由は何ひとつない、と正当な怒りの感情を持つようになった。このガマンしない娘たちを育てたのは、母親の世代の女たちである。東大教師だったわたしの前に現れるのびのびした元気な女子学生たちを見ると、彼女たちの背後に、母親の背後霊を感じることがある。息子に劣らず娘が母親の「作品」になったとき、その背後には、母の世代の女たちの怨念や悔しさが溜まっているように見える、わたしのような生き方をしてほしくない、と。娘の成功は親子2世代がかりの達成なのだ。

第3は情報技術の革新である。SNSを活用したオンライン・アクティビズムはふつうの市民が声をあげるハードルをいちじるしく下げた。ICTは弱者の味方、情報の民主主義のツールである。それをつかいこなす世代が登場した。ITデバイドの上の世代だからといって、苦手意識で敬遠しているわけにはいかない。「#KuToo」はたったひとりの女性のつぶやきから始まったし、「#検察庁法改正案に反対します」は政権のごつごう主義的な人事を押し戻して、成功体験をもたらした。Change.orgやReadyforなどの署名サイトが登場し、小さなつぶやきを集めて大きな声に変換した。政権もネット世論の声に圧されるようになった。自治体や企業の性差別広告がSNS上で炎上するようになり、マスメディアもネットメディアの動向を無視することができなくなってきた。

2021年の衆院選では、国政選挙史上初めてと言ってよいほどジェンダー課題が政治的争点になった。とりわけ選択的夫婦別姓をめぐる反対派の候補を落選させようと「ヤシノミ作戦」がネット上で拡がり、一定の効果を上げた¹²⁾。「#選挙に行こう」キャンペーンもネット上に拡散した。20代の能

條桃子さんは若い候補者を増やそうとNoYouthNoJapan¹³⁾を立ち上げた。女性議員が経験するセクハラを初めて調査研究し、彼女たちをサポートするStandbyWomen¹⁴⁾を創設した濱田真里さんは20代の大学院生だ。

第4に、この新しいフェミニズムの波にはもうひとつの特徴がある。それは担い手の若い女性たちが過去のフェミニズムを再発見、再評価していることである。性暴力に対する寛容度はいちじるしく低下したが、それも長きにわたる地道な裁判闘争や研究成果の蓄積と、啓発や学習活動のおかげである。「性と生殖の自由と権利」についても、半世紀以上前からの女性運動の蓄積がある。セクハラや痴漢にしても、昨日今日問題になったわけではない。第二波フェミニズムは、先行の世代の女性運動と断絶したところから始まったが、また先行世代は必ずしもリブの登場を快く迎えたわけではなかったが、それに比べて今日わたしたちが経験している若い世代のフェミニズムの盛り上がりには、歴史に学ぼうという姿勢が見える。わたしたちもまた先行世代から学んできたのだし、先行世代の獲得した成果の上に立っている。

だが、歴史の教えるところでは、獲得したと見えたものも状況が変わればたやすく失われることもある。歴史には一歩前進二歩後退もある。アメリカで最近になって70年代に中絶を合法化した最高裁判決が覆ったことは、多くのフェミニストに衝撃を与えた。近年の各地の女性センター統廃合の動きがそうだし、性教育へのバックラッシュもその例である。歴史はつねに流動的である。

2009年、わたしが理事長を務めるウィメンズアクションネットワーク（以下、WAN）が創設されたのは、バックラッシュの最中だった。ネットの世界で女性は圧倒的に後れをとっており、検索ドライブで「フェミニズム」と入れると、上位に「フェミナチ」が登場するありさまだった。コミュニケーションツールがプリントメディアからITメディアに変わった現実を目の前にして、ネット界に出ていかなければ存在しないも同然と感じて、背水の陣でスタートしたのがWANである。それから13年、WANの裾野もしだいに広がってきた。

WANは分野と地域と世代を超える女性の連帯をめざしてきた。ユーザーの資格を問わず、アクティビストから研究者、行政職員、政治家など、多様な市民が参加している。またウェブメディアの利点は発信者のロケーションを問わないことである。日本各地から、また国境を超えたアクセスが可能になった。WANのもう1つのミッションはフェミニズムの世代交替、つまり世代を超えた女たちの連帯だった。

わたしたちの前にはミニコミでつながった先輩たちがいる。また女性学・ジェンダー研究のパイオニア世代がいる。その人たちの記録をレガシー（相続財産）として残そうと、ミニコミ電子アーカイブ（WANミニコミ図書館）¹⁵⁾をつくり、また最終講義アーカイブに動画を蓄積した。先輩の研究者が育てた後進の研究者も年々増えつつあり、その情報を30年分蓄積した「女性学・ジェンダー研究学位論文データベース」もある。どの公的機関も大学もやってくれなかったことばかりだ。わたしたちの前に行く人たちから手渡されたものを、わたしたちはわたしたちの後に来る者たちに大切に手渡す責任がある。

社会が変わる時。変化は若い世代からばかり起きるとはかぎらない。あらゆる世代がその変化から影響を受ける。上の世代の女たちも、「こんなことは自分の時代で終わりにしたい」と思うようになった。女が被害者でありつづけることで、次の誰かに対して加害者になることもある。被害者であることを、誰かがどこかでやめなければ、被害の連鎖は続くだろう。

自分が受け取ったものよりも、ほんの少しでもましな社会を次の世代に手渡すために。

注

- 1) 伊藤詩織『ブラックボックス』文藝春秋、2017年
- 2) 中島京子さん連載対談「扉を開ければ」『本の窓』（2018年2月号、小学館）
- 3) 2018年4月21日新聞労連全国女性集会
- 4) 「全国・在京・在阪 民放テレビ局の女性割合調査 結果報告」（2021/5/24）

I 多様な世代でともに進めるジェンダー平等

<https://www.minpororen.jp/?p=1815>

- 5) 2018年4月28日新宿アルタ前「#私は黙らない」集会
- 6) 私たちは映画監督の立場を利用したあらゆる暴力に反対します」(2022年3月18日) <https://action4cinema.theletter.jp/posts/877aa260-a60c-11ec-a1bd-3d3b3c9fc3bd>
- 7) VoiceUpJapan「女性軽視発言をした岡村隆史氏に対しNHK『チコちゃんに叱られる』の降板及び謝罪を求める署名活動」[https://www.change.org/jp/](https://www.change.org/jp/石川優美さんも同時に「岡村学ベーナインティナイン岡村隆史さんを起用しー女性の貧困問題やフェミニズムについて学べる番組を制作ー放送してください」という署名活動を開始した。https://www.change.org/jp/)石川優美さんも同時に「岡村学ベーナインティナイン岡村隆史さんを起用しー女性の貧困問題やフェミニズムについて学べる番組を制作ー放送してください」という署名活動を開始した。<https://www.change.org/jp/>
- 8) チママンダ・ングディ・アディーチェ『男も女もみんなフェミニストでなきゃ』河出書房新社、2017年
- 9) ロクサーヌ・ゲイ『バッド・フェミニスト』亜紀書房、2017年
- 10) 上野千鶴子『女ざらい ニッポンのミソジニー』紀伊国屋書店、2010年／朝日文庫、2018年
- 11) 上野千鶴子『フェミニズムのひらいた道』NHK出版、2022年、清水晶子『フェミニズムってなんですか』文春新書、2022年
- 12) 「ヤシノミ作戦結果報告」<https://yashino.me/s2022/>
- 13) <http://noyouthnojapan.org>
- 14) <https://www.facebook.com/standbywomen.info>
- 15) WANミニコミ図書館は、NWECの情報センターとリンクして、電子化したミニコミ情報の公開のために連携している。<https://wan.or.jp/dwan#gsc.tab=0>

(うえの・ちづこ 認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN)
理事長／東京大学名誉教授)